＜書評＞

障害当事者の存在と自由
――時岡 新著『＜不自由な自由＞を暮らす――ある全身性障害者の自立生活――』（東京大学出版会 2017年刊）を読む――

Existence and Freedom of Disabilities : Arata Tokioka, A Daily Life of Inconvenience Freedom : Independent Living of a Person with Severe Disability, University of Tokyo Press, 2017

庄司俊之

SHOJI, Toshiyuki

まえがきによれば、本書は「ひとりの全身性障害者、香取さんに訊いて、かれの自立生活のありさま、とくには介助者たちとの日日のやりとりを素描した一篇」である。著者は、香取さんから自立生活の様子を十数年にわたって聞き取り、対話を重ね、折に触れて発表してきた５本の論文に補論を加えて本書を上梓した。ジャンルとしてはライフヒストリーということになるだろうか。が、われわれが普通に思い浮かべるライフヒストリーの記述とは若干印象が違っている。しかし、むしろその点こそが本書に独特の魅力と奥行きを与えているように思える。以下では最初に本書の形式的な特色に触れ、そのうえで本書の核というべき香取さんの語りの面白さについて紹介し、「存在」「制度」「差別」「自由」などのテーマに絞って若干の考察を加えていきたい。

1. 友情の記録としてのライフヒストリー

最初に形式についてである。はじめに「これは○○ではない」というかたちで本書の特色を消極的に指し示し、そののち「では何なのか」ということを述べよう。

念のため確認しておくと、自立生活とは、日常的に介助＝手助けを必要とする身体障害者、なかでも重度とされる人々が「親の家庭や施設を出て、地域で暮らすこと」をさす。短い書評でこれ以上立ち入る必要はないだろうが、そうした生活のありさまを聞き取るという場合、たとえば次のような記述スタイルが想像されるのではないか。まず朝は何時に起床するか。そしてどうやって着替え、顔を洗い、歯を磨き、排泄し、学校や職場へと出掛けて行って１日が始まるか。いわゆる健常者であれば意識すらしないで進んでいくステップだが、全身性障害者はそれらをすべて意識化し、介助者をどう使うかを考え、そこで様々な葛藤を生じさせながら自身に固有の生活様式を組み立てていかねばならない。たしかに当事者（香取さん）にとってはきわめて日常的でとくに語る必要も感じられないステップかもしれず、一見してとても静かなプロセスには違いないが、そこから記述を始め、生活の様子を再構成するという作業がありうると思える。だが、本書ではそれらは承前のことに属し、そういう記述にはなっていない。先回りして言えば、本書ではそうやって「生活」を再構成するのではなく、「生活についての考え」に切り込んでいこうとする。是非ではなく、本書の記述の焦点がそういうところにあることを最初に確認しておきたい。

また、別様には次のように言えるのではないか。ライフヒストリーの記述法自体必ずしも一枚岩ではないが、量的データでは接近できない対象に固有な世界を描き出すこと、また、特殊な事例をつうじてその背後に社会の姿を浮かび上がらせること、ライフヒストリーを記述しようとする者には概ねそうした志向が共通しているだろう。だが、本書は香取さんの個性を描き出そうとはしていない。もちろん語りから自ずと浮かび上がる個性は感じ取れるのだが、著者＝聞き手は必ずしもそこに照準していない。なぜそういうことになるのか。

以上は本書に対する疑問や批判ではない。そうではなく、対象が要請するスタイルがこれなのだと言おうとしている。どういうことか。まず、語り手の香取さんは自立生活を生きる一当事者であるだけでなく、自身の自立生活を実現、継続していくために自立生活センターを設立し、その運営にあたる当事者でもある。つまり、香取さんは自分だけの個別の生活を成り立たせるために全体の調整者であることも強いられた存在なのだ。だから、

受稿日2017年12月11日　受理日2017年12月18日
専修大学人間科学部兼任講師

香取さんの生活を淡々と描き出すことは、それは香取さんの生活の半面のリアリティーには迫れるかもしれないが、決して全的なリアリティーには届かない。香取さんの語りは自分自身のこと、他の障害当事者のこと、センターでの経験などを自在に横断し、必ずしも自分だけの固有な事情には収斂していかないが、それは彼が個別の視点と全体の視点とをたえず循環させながら自身の生活を成り立たせている生活者だからである。

そもそも香取さんに限らず全身性障害者というものは、いわゆる健常者であれば究極のプライバシーとも思える食物摂取や排泄といった行為を、他者を介在させることでしか実現しえない。つまり、彼らは、先ほど触れたような「個別の世界を描き出してそののち社会を」といった順序で描ける対象ではないのだ。そもそも経験の中核に他者がいるのである。

あるいはこうも言えるかもしれない。われわれは普通、生活するとき、何かを選んで何かを選ばない、そうした選択を繰り返している。既存の選択肢集合に対してそこで何を選択するかが問題で、それが個々の生活を成り立たせていると感受し、選択肢集合のありかたと個々の選択とは切り離して考えたりする。けれども、全身性障害者、とりわけ香取さんにとって、個々の選択と選択肢集合全体に関わる問題は多くの場合に殆ど一致している。実際、香取さんは個別の選択をする生活者であるとともに自立生活センターの運営者として全体の選択肢集合を調整する存在でもある。むしろ、われわれのように個と全体、個別事例から社会全体へなどと順序よく切り分けて考えるほうが強い仮定のうえに立っているのかもしれない。本書のスタイルについて考えると、そんなことを思わされたりする。

少々先走りすぎたが、本論に入るまえにもうひとつだけ触れておこう。聞き手のポジションについてである。旧来のインタビュー調査ではインタビュアーの痕跡は消されなければならなかった。それが客観性を擬制する手続きだったわけだ。それに対し、新しいライフヒストリー研究では聞き手自身をも書き込み、「この聞き手だからこそ引き出せる語り」に注目したりする。本書でも、聞き手が何を聞いたか、どこに疑問を感じ、重ねて何を聞いたか、そのプロセスが詳細に描き出されている。それが嵩じていくと、やがて語り手の語りを再構成するタイプのライフヒストリーには留まらず、やがて対話の記録に近づいていく。本書の地の文ではあまり強調されていないが、この書評の冒頭で「聞き取り、対話を重ね」と表現したのはその意味である。だが、それが本書の瑕疵になるだろうか。

たとえば次のようなくだりがある。

香取　こわいと思うから言えないってこともあるかもしれないけど、厳密にはそうじゃなくって。基本的に、他人だからこわいってことですよ。（間）だって、いつだってそのひとは出ていくことができるわけじゃん。介助をやめることだってできるわけだし。

筆者　やめるというのは、たとえば映画館に置いて帰ってくることか。

香取　うん。それは介助にむかついたってことじゃなくても、ただたんに、こいつのしゃべりがむかつくとか価値観がむかつくとか、そのレベルで。こいつはむかつくから置いてけ、みたいなこと。

筆者　それは介助者に徹していないという問題ではないのか。

香取　ま、違う問題ですね。介助者に徹してても、そういうことはできるわけです。

しばらく沈黙がつづいた。筆者がまたも混乱したためである。香取「え、だって、なんで分からないの？ っていうか、こいつむかつくっていうので置いていくことはあり得ることでしょう。だって、介助者はべつに僕が好きで来てるわけじゃないわけじゃないですか」（本書p.37－38）

著者＝聞き手があとで注意書きしているように、文字化すると激しく聞こえるかもしれないが、実際の声はときに途切れ、か細いものであったという。だが、「だって、なんで分からないの？」と思いがけず強い反応があったことを臨場感あるかたちで表現しえているのは本書のスタイルの功に属するだろう。そもそもライフヒストリーは「聞き手と語り手の共同制作物」という言い方があるが、本書はまぎれもなくそうした共同制作物になりおおせている。執拗に問いを重ねるのは研究の必要だけでなく聞き手の個性に属するところも大きいだろうが、それを受け、執拗に言語化しようと努力する姿は間違いなく語り手の個性だろう。本書で描かれるのは香取さんだけではない。聞き手・語り手双方の存在が明示され、そのふたつがぶつかる瞬間が描き出されている。そ

の意味で本書は、ふたりの友情の記録でもあるように思える。

では、その記録には何が書かれているか。

2. 本書の諸論点

こうした作品を紹介する場合、どうしても語りのライブ感覚を消去し、声ややりとりのニュアンスを削ぎ落とし、魅力を減じるだけでなく、ときに誤って伝えてしまう恐れがある。そうしたエクスキューズを最初に申し述べたうえで、しかし評者が受け取ったことがらを「報告する」というスタンスで以下に書いていきたい。聞き取りは十年以上にわたるのでテーマが各章にまたがることがあるが、ここでは「存在」「制度」「差別」「自由」に絞ることにする。

2-1. 存在条件としての他者

第１章「介助者という他人について」では、香取さんが自立生活を始めたきっかけから聞き取りが開始されている。香取さんは養護学校卒業後、遠方の大学に進学し、そこで母親の介助を得て学生生活を始めるが、それ以前、香取さんはすでに親元を離れて寄宿舎で生活していたので、母親にとっても日常的な介助は６年ぶりの難事だった。やがて母親は行き詰まり、ではどうするかという段になって、香取さんはゼミやサークルの仲間や募集によって集まった学生らからなる介助グループを立ち上げ、その介助を得て自立生活に入ることを選ぶ。そこで香取さんが介助者という存在をどう理解していたか、また介助者たちはどういう意識をもった人々だったか（と香取さんは受け取っているか）が最初の話題となる。そして、実際に自立生活を始めたときにどのような課題に直面したか、おもに介助者との関係が語られていくことになる。

ここで興味深い語りがさっそく登場する。食事や排泄など、「生きるため」に必要な介助を介助者に指示することについては香取さんに何の躊躇もなかった。だが、床掃除などのほうがむしろ抵抗感があったというのである。普通は逆だろう。なぜそうなるのか。思いきり要約すると、香取さんが介助者の思いをあまりに先に察してしまうからである。床掃除の例で言えば、介助者たちは香取さんの「生きるための必要」を充たすためにやって来ている。食事や排泄はその「必要」に該当するから香取さんは躊躇なく指示を出せる。では床掃除はどうか。必要という点では切迫性が低いと香取さんは思い、実際、床掃除という「必要性の低い」作業を指示されて不平をもらした介助者もいたらしい。そういう「介助者は不満かもしれない」という「察し」が香取さんを沈黙させるのだ。

類例は、駅やデパートのトイレや階段や店の中、あるいは何の変哲もない道路や日々の生活のひとつひとつの場面で挙げられる。たとえば電車に乗り、香取さんの乗った車椅子を中央に固定して、自分は端の席に座った介助者がいた。この介助は明らかに不適切だろう。しかし香取さんは「疲れているのかな」「少しは離れたいのかな」などと察し、その不適切さを指摘せずに沈黙してしまう。この何割かは、香取さんが当初指示出しに不慣れだったことに起因していただろう。実際、十数年ののちには（５章の語りでは）香取さんも変わっている。けれども、その十数年後、今度は新たな察し方が登場する。最初は車椅子の障害者を介助してバスに乗ることがみずみずしかった介助者も、同じことを繰り返しているうちに「またか」と思うようになる。実際に介助者のそういう態度を感じ取り、それでも指示を出せるかどうか。沈黙しないにせよ、躊躇は「察し」を通じてつねに残ることになる。

ここに、先ほど引用した「分からないの？」が続く。介助者は、初心者に限らず、どんなに熟練し経験を積んでいようが「まったき他者」である。だから、指示はつねに通るか通らないか不確実であり、傍らにいることそのものが不確実だ。それゆえ「怖い」。その恐怖は介助者の性格や慣れに由来するものではなく、介助がなければ生きていけない全身性障害者の存在条件に属している。健常者なら遠くにいて難なくやりすごせる他者があまりに近くにいるわけだ。それゆえ、香取さんの先回りしすぎる「察し」もまた、彼の人間観察力に由来する以上に彼の存在条件が命じるものと言えるのではないか。

気楽な第３者は「言えばいいのに」と思うかもしれない。そういう面もあるだろう。だが、その「言う」の手前に広がっているものを、論理的な図式ではなく（それはいま、評者が示したものだ）、香取さんの肉声というかたちで引き出したこと、本書第１章の迫力のひとつはそのあたりにあると思われる。

2-2. 制度、その手前にあるもの

続く第２章「ピアカウンセリングの経験」では、香取さんが運営に携わる自立生活センターの事業のひとつ、ピアカウンセリングが聞き取りの端緒になっている。手短に説明すれば、ピアは同胞を意味し、同じ境遇の当事者同士が語り合い、同じ境遇だからこそ深く理解しあ

え、それが各人のエンパワメントにつながるということを企図して実施されている。自立生活センターの核となる制度だが、詳細は本文にもある通り他書にあたられるとよい。

いま「端緒」と書いたが、この章では香取さんの「ピアカウンセリングの経験（制度を利用した経験そのもの）」が中心になっているわけではない。というのも、香取さんは一方でセンターの運営者としてピアカウンセリングという制度が必要不可欠との考えを崩さないが、他方で一当事者としては自分がそのカウンセリングを利用することには違和感をもち、「気持ち悪い」とさえ言うからである。だからこう言い換えよう、制度の必要性の認識と香取さん自身の思いの落差が第２章の端緒であると。

ふたたび思いきり要約すると、ピアカウンセリングは対等の立場で語り合うのでなければ意味をなさず、香取さん自身、（本人がこう言えば語弊があるだろうが）きわめて明晰で表現力も豊かであり、彼の対手となって語り合える当事者など皆無に近い。その点で香取さん自身は目下ピアカウンセリングに必要性を感じない。また、「気持ち悪い」というのは、ピアカウンセリングが当事者同士の語り合いを実現するために、最初に互いを枕で叩き合ってみたり、相手の言うことを最後まで聞き、言ったことを一切否定しないなど、様々な人工的なルールを課しており、著者の言葉を借りれば日常的な場面にくらべて「ヘン」だからである。ここまでは一応わかるとして、では、にもかかわらず、香取さんがそれを必要と考えるのはなぜか。評者なりの表現をすれば、第２章のやりとりから浮かび上がってくる「制度」の手前にあるものゆえである。

香取さんは、障害当事者たちは日常的に言えないことが多いと言う。だから、ピアカウンセリングのように時間と空間を限定してでも肯定的に話せる場所があることや実際にそこで話す経験は安心感につながると言う。自分には必要ないが、それがあることは必要であると。しかし、聞き手は食い下がる。分析的な意味で、半ば不用意に、それならピアカウンセリング以外でも他の場所で同等の効果が見込めるのではないかと。それに対して香取さんは、間髪を入れず（ここで「間髪入れず」というのは、やりとりの緊迫度がそういう読書体験を生むということで、実際の時間のことではない）、「ピアカンはダメって言ってんじゃん」と返す。聞き手はそこではたと気づく、われわれの日常がたかが何気ない会話においてすら否定に満ちていること、その否定がとりわけ障害当事者に及びやすいということに。

あらためて聞き手は問う、肯定的に聞いてもらえて嬉しいならわかるが、それを「安心」と表現するのはなぜか。また、ピアカウンセリングの場で得られた安心はその外部での安心にもつながるのかどうか。どうやら外部での安心につながるかどうかは関係ないらしい。そもそも嬉しい・嬉しくない以前に、肯定され、すべて包み隠すことなく「言う」ことすら難しい状況が障害当事者たちを取り巻いている、そうしたことがやがて香取さんの語りからうっすらと浮かび上がってくる。そこで聞き手は言う、「つまりあなたにも「聴いてもらいたい」という気持ちがあるのね？」――香取さんは答える、「それはあるかもしれない」と。ここでは香取さんもまた、対話をつうじて自分の気持ちを確かめている。何度もやりとりした彼方で、彼の気持ちもまた掘り当てられているのだ。

ピアカウンセリングという制度の必要性を言葉で表現するのはあるいはたやすいのかもしれない。だが、それが本当に必要とされる理由とは、この聞き手と語り手とが、互いに探りあい再発見したりしながら、かろうじて見出される次元に根を張っているのではないだろうか。これほど言葉をもった香取さんですら無意識下に抑圧している希求、そうした希求を妨げる否定的な言葉に満ちた日常――「制度」の手前にはそうしたものが広がっているのだと、ふたりの対話から感じられた。

2-3. 差別の現象学

第３章「障害当事者の主体性と非力」では、当初、聞き手は自立生活センターから派遣される介助者のありようを聞く予定だったが、思いがけず香取さんが事故に遭ったことから語りはべつな方向に深められていく。依然として問いは自立生活における介助者との関係周辺をめぐっているのだが、対話は掘り下げられ、違った相貌を見せる。

事故は、車椅子を押す介助者の不注意から起こった。車椅子の速度や道路の段差に注意するのは介助の基本のはずだが、必ずしも初心者でないはずのその介助者がそうした基本を怠ったため香取さんは車椅子から放り出され、大怪我を負った。しかし、被害者のはずの香取さんは自分が「甘かった」と言い、責めの矛先はむしろ自分自身の指示出しをめぐる問題にむかっていく――どういうことか。

第３章第１節は「介助者の無能」と題されている。その介助者だけが無能というのではなく、介助者一般には

抜きがたく無能さがあることを言おうとしている。ごく素朴なイメージでは、全身性障害者のほうが能力を欠き、それを介助者が手足となって補う。したがって介助者は能力、そして「自由」を拡張する存在であると理解されたりすると思うのだが、ここでは逆になっている。平板化を恐れず言えば、専業主婦のように上手に料理できない者はその点で能力を欠いている。あるいは地図や路線図を読むのが苦手な者は外出する能力において欠け、その点では「不自由」である。われわれは大なり小なり何らかの意味で「無能」「不自由」なのだ――たとえそういうレッテルを貼られずそのようには意識しないとしても。こうした事実、事実認識は、次章・次々章に引き継がれ、とくに第５章のタイトルにもある「介助者を育てる」というテーマにつながっていくわけだが、それはひとまず措こう。

そうした「無能な介助者」、控え目に言っても「能力が不均等な介助者たち」のシフト表を見ながら、香取さんは、事前に指示出しの言葉を練り、説明にかかる時間などを勘案しながら１日・１週間・１ヶ月の生活を計画し、組み立てていく。同じ言葉でも人間が違えば受け取り方が違ったりするので、それを先回りして「察し」、考慮に入れ、介助者Ａならできる、介助者Ｂなら予定を縮小、介助者Ｃならしないなどと判断する。介助関係は当事者が意思を表明するだけでは成り立たないのだ――介助者の個性を把握し、適切に指示を出し、それを介助者が正確に受けとめる厚みあるコミュニケーションがなければ。だから、３章冒頭の事故は、シフトの変更を軽く見積もった自分に責任（の一端）があると香取さんは考えた。

しかし、「厚みあるコミュニケーション」というのは介助関係の理想型である。この理想型においても、香取さんは誰かには指示を出すものの、他の誰かにはそもそも指示を出さなくていいように、予定を組まなかったり排泄さえ我慢したりする。「うんこ出るな！」「出ないでくださーい」は笑いごとではない。ここでも香取さんは第１章でのように「言わない」、もっと進んで「言わなくていいようにする」。とくに事故後の激痛が残る生活ではそうだった。そこを聞き手が踏み込んで聞く。シフトの変更について、あるいはそれ以前に遅刻する介助者に対して、また、排泄介助の不慣れについて、さらに「手を洗って」の一言がなぜ言えないかについて。ここでも香取さんは第１章と同じように介助者の思いを先取りする。また、いま触れた厚みあるコミュニケーションの「面倒くささ」を言う。たくさん言い過ぎて重荷に感じられ、立ち去られても困るとも。そして、実際には何度も言ってきているのだが、同じ相手に繰り返したり、あまりに多くの相手に対して同じことを言わねばならなかったりすると呆然とし、立ち尽くすこともあったようだ。食事の際、「ハナ掴んだ手で介助すんな」と一体何人に言えばいいのかと。

やがて、ひとつの像が浮かび上がってくる。たとえば欠勤の仕方は研修でも扱われる初歩的な事柄のはずだが、そうしたことが守れない多くの介助者は「悲しい」、怒る以前に「悲しい」という。そして怒らず悲しむほかないのは、すでに何度も言ってきたからであり、しかし依然としてそういうことをされてしまう自分が「悲しい」からだ。自分がどれだけ大切にされているかがわかってしまう。そうした「悲しみ」を知られてしまうことも「悲しい」。そんなときこそ声を上げねばならないと運動の担い手たちなら言うだろうが、声を上げる気力も失せる「悲しさ」が第３章の最後に突き止められている。

評者はこの章の後段を「差別の現象学」として読んだ。しばしばフォーマライズされた差別問題では、然々の言葉や行為は差別にあたるとのガイドラインが成立し、ある言葉や行為が差別に該当するかどうかだけが問われて終わる。その意味ではシフト変更したり遅刻したりする介助者は何ら障害者を（あるいは香取さんを）直接には差別していない。だが、そうした「悲しさ」こそが、こう言ってよければ差別の構造の基層をなしているのだ。フォーマライズされた差別問題の余白に無数に点在し、そうした思いを障害当事者に強いることによってわれわれは直接差別しないままに差別構造の再生産に加担しているのではないか――評者もまた、このくだりで呆然とさせられた。

2-4. 自由と自由、不自由と不自由

第４章「自立生活の手間と厄介」と最後の第５章「介助者を育てる」では、自立生活の核とも言うべき自己決定について考えさせられた。一方では微視的な場面が語られている。「さしみのしょうゆ」をどれだけつけるか、三角形のおにぎりはどうしたら作れるかなど、それらは一見すると他愛がない。が、他愛がないと感じるのは、感じる者がそうした点では不自由していないからにすぎず、第３章で触れた「無能」「不自由」な介助者を使って食事をする際にはまず真っ先に自己決定が直面する壁がこれなのだ。まずは香取さんが目のまえにする「不自由」の切実さを思わねばならない。食べることを

はじめとする生命・生活の基本的なことがらにおいて、思うのとは違ったかたちで食べさせられる、食べるのを強いられ続ける「不自由」がそこにある。

しかし読者である評者は、ここで翻って次のように考えた。自分が介助者として香取さんの傍らにいる場合、私は生活能力が低いので、おそらく彼はかなり「不自由」だろう。けれども、そうした細かな点にまで配慮し実践できるよう、自分自身の「無能」「不自由」（当事者が適切と思う量のしょうゆを上手に注げない、そういう配慮ができないのは「無能」であり自分自身の「不自由」だ）を取り除きたいと思う。そうやって少しだけ自分が「自由」になることこそが当事者の「自由」を広げることにつながるのだと。自分がそれまで持っていなかった「能力」や「自由」を手に入れることで他者が「自由」になるという経験は自分にもある、あれだ、と思い至った。「自由」は決して孤立しているのではなく、他者の「自由」によって初めて可能になるということ――それは障害者に限った話ではなく、「自由」の本質に属する問題だろう。少々楽天的すぎるかもしれないが、ここで評者は、自己の「自由」と他者の「自由」が響きあう瞬間がありありと想像できる気がした。

他方、香取さんは自立生活センターの運営者として、他の利用者と介助者たちの関係をコーディネートする者でもある。聞き手の問いはこの点にも及び、急いで結論めいたことを言えば、香取さんは自分自身の自立生活の存続とセンターの存続とがぴったり一致する問題なのだと、聞き手も驚くくらいに断言している。巨視的なレベルで自己の生活と制度の存続の問題とが一致するということは、微視的なレベルにおいて介助者の「自由」と当事者の「自由」とが相関することと同心円上の出来事だろう。少なくとも自立生活が実験段階を過ぎ、ある程度普及した状況になってくると、介助者の量や質を確保する問題はただちにセンターの課題そのものとなる。香取さんの断言――自身の生活と制度の存続が一致するとの断言――には、彼の自立生活の営みにすでに時間の経過や歴史が深く刻み込まれていることが窺われる。

とはいえ、香取さんの語りは決して楽天的ではない。著者＝聞き手は「三角形のおにぎり」を作ろうと頑張る香取さんと介助者の姿について、香取さんの思いとはべつにと断り書きしながら「微笑ましく」見守っており、評者自身もどちらかと言えばそうした印象をもつが、「三角形のおにぎり」にシンボライズされる「不自由」は香取さんの目のまえに数限りなく横たわっている。この落差を想像しなければならない。自己の「自由」と他者の「自由」とは響きあう以前にあまりに「手間」が多く、「厄介」であり続けざるをえない。評者は「自由の交響」のほうを強くイメージしたけれども、本書全体がその難しさのほうを強調している点は念のため言っておく。

そして第５章「介助者を育てる」ではいくつも論点が矢継ぎ早に指摘される。この章はひとりの利用者の死をめぐるあれこれから始まって、こうして生から死へとテーマを一巡しながら、香取さんの十余年を振り返る内容になっているが、センターが一応安定し、介助が職業化してきたことによって介助者の質が変わってきたこと、介助者の育成にも別種の問題が現れつつあること、年季をへた介助者でさえ熟達するどころか最初のみずみずしさを失い、駅員や店員に「当事者に聞いて下さい」という言葉を言わなくなること――これはじつにショッキングな現象だ――、あるいは多くの当事者が自立生活に参入することによって逆に「自立して何がしたいか」が見えない者が散見されるようになったこと――これは香取さんが一番危惧する問題だ――、そして福祉制度改革が自立生活実現の追い風になったのはたしかだが、制度が変わりうるということはこの制度もいつまで続くかわからない、そうした不安があるということ――断続的な変化が人々の生に不安定さをもたらすというのはハイ・モダニティーの問題だろう――などが語られる。

本書は、自由と自己決定という自立生活の核たるテーマについて多くの示唆的な語りを記しながら、最後にそれを社会状況、時代状況の変化という文脈のなかに置き直して結ばれる。補論「聴きとりの背景」は、最初の介助グループから自立生活センターの設立・運営までの過程をチラシや会報を参照しながら年代記的にまとめたものである。

3.

あらゆるライフヒストリー作品がそうであるように、そして本書を評者が読む場合などにはいっそう顕著に、３回、あるいは３つの視点をもって読む必要があると思える。ひとつは語り手（本書の場合は香取さん）に照準する読み方だ。香取さんの存在、その声や語り方を想像しながら、彼の言っていること、その意味、なぜそういうことを言うかなどを考えながら読む。そしてふたつ目に聞き手に照準する読み方である。とくに本書の聞き手はともすると聞き流して素通りしてしまいそうなところで立ち止まり、執拗に問いを重ねている。また、この聞き手は自分の投げた問いが迂闊だったときにはそれを明

確に記し、恥じ入ったりする。評者はそうした記述を読み、自分ならそこで立ち止まれるだろうか、自分ならどう感じるだろうかと考えた。するとみっつ目に、聞き手と語り手を超えた次元が開けてくる。それは読み手である評者が自分自身について考え、あるいは社会について考えるといった読み方である。私自身、介助の仕事には多少なりとも携わったことがあるのでとくに、自分がその場面に立ち会っていたらどうだろうと考えた。そこでは瑣末な学びから自分自身の思いの確認、さらに理解の深まりや新しい発見などがあった。そうした気づきは、社会学研究に携わる者であればこの社会の再点検へとつながっていくであろう。その一端を前節で書いた。そしてあらゆる読者は読後の感想をそのまま打ち捨てて構わないはずだが、本書での対話があまりに濃密なので、刺激され、つい対話に参加してみたい気持ちになって以上を書いた。

書評のつねとして、最後に批判的なコメントを書かねばならない。まず真っ先に感じるのは香取さんという人物自体の分析や理解につながる問いが少ないことである。聞き手は彼の考えに注目し、全身性障害者の存在には目が届いているけれど、香取さんの個性を記述することにはあまり関心がないようだ。が、一読者として言えば、香取さんの語りに魅力を感じるからこそ、この個性はどこから来たのかを書いて欲しいと思った。また、補論では香取さんたちの活動の軌跡が資料的に記述・記載されているけれども、どういう好条件や悪条件があったのか、他の活動と比べてどういう特徴があったのか、分析とまでは行かなくても一定の示唆があってもよかったのではないか。さらに、本書がどういう区切りで一冊にまとめられたのか、また、今後ありうる研究の方向性などを最後にまとめてもよかったと思う。本書には、介助者研究、自立生活運動という社会運動の研究、あるいは自由論であってもよい、そうした諸研究とつきあわせることによって多くを引き出しうる豊かさがあると思うからだ。

とはいえ、以上は不要な指摘だったかもしれない。聞き手と語りの関係、あえて言えば友情は終わらないのだから、本１冊の区切りなど便宜上のものにすぎないだろう。また、友人をダシに研究計画を開陳する趣味など著者にはないに違いない。そもそも友人と向かいあったとき、相手の個性や性格をむりに明らかにしないでも人間関係は築けるのであって、興味本位で人物を云々するのでなく、もっと大事なのはそのひとの声や考えに耳を傾けることだ、そうした著者の声が聞こえてくるような気もする。本書は、たしかに多くのことを教えてくれ、大事なことが書かれているのだが、いかにも研究者然としたスタイルはいったん脇に置き、慎ましく、友情の記録として公刊されたものと受け取ることができるように思われる。

本書のタイトルにある「不自由な自由」は香取さんによる命名であるという。本書のどこにも書いていないが、評者がこの文章を書くにあたって著者に問い合わせた際に聞いた話である。その「不自由な自由」は、さしあたって全身性障害者による自立生活の本質を表現したものだろうが、評者は介助者の立場に立ちうる自分自身の「自由」に孕まれた「不自由」――「自由な不自由」を思わされ、また、その「不自由」が反転しながら少しずつ「自由」の空間を広げていく可能性を感じ取ることができた。そして戦場はいつも自由／不自由の境界線上にあって、香取さんはいつも彼方を目指している。だから本文は次のように結ばれるのだ――「かれの「自立生活」もあの日、あのときとは異なってきた。この先でもかれはまた、次の「はじめてのできごと」を迎える」と。本書に明確なエンドマークがないのは自立生活が終わりなき試みだからだろう、そのことが読者にもよく伝わってくる一文と思う。

文献

安積純子・岡原正幸・尾中文哉・立岩真也，1990,『生の技法――家と施設を出て暮らす障害者の社会学』，藤原書店.（増補改訂版：1995／文庫：2017，生活書院）

安積遊歩・野上温子，1999,『ピア・カウンセリングという名の戦略』青英舎.

桜井厚・石川良子編集，2015,『ライフストーリー研究に何ができるか』新曜社.

谷富夫編，1996,『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社.（新版：2008）